

令和7年度 第37回 北陸地方ダム等管理フォローアップ委員会 議事要旨

1. 日 時 令和8年3月17日(火) 14時00分～16時00分
2. 場 所 東京都千代田区麴町 2-14-2 NKビル2階
3. 出席者 辻本委員長、池本委員、関島委員、中田委員、野村委員、平林委員、柳原委員
4. 議 事

- (1) 宇奈月ダム定期報告書(案)について
- (2) 大川ダム定期報告書(案)について
- (2) 北陸地方ダム年次報告書(案)について

(1) 宇奈月ダム定期報告書（案）について

【総括】

令和2年度～令和6年度の調査結果の分析・評価をとりまとめた宇奈月ダムの定期報告（案）について審議された。委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は下記のとおりである。

なお、最終とりまとめは委員長一任とすることです承された。

1) 防災操作

- ・今回の定期報告より、重点管理項目にも設定したうえで、連携排砂を取り入れることとなったのは、とてもよい取り組みである。
- ・ダムだけではなく、流域全体の流域治水に関する話題も反映するとなお良い。
- ・地域での関心を考えると、メディアに対する現地説明会等の取り組みは重要である。

2) 利水

- ・なし

3) 堆砂

- ・なし

4) 水質

- ・水質評価項目として透視度を使用しているが、貯水池では透明度を採用するのが一般的。今後は透明度にて整理するのが望ましいと思われる。

5) 生物

- ・底生生物調査は連携排砂の影響を受ける。定期的な調査が連携排砂直後の場合、ほとんど底生生物が確認できない可能性がある。定期的な調査の時期と連携排砂時期の関連整理、および、連携排砂時に同様の調査を実施している場合は、今後、あわせて整理することが望ましい。
- ・今回の定期報告から連携排砂についても説明を行ったことで、排砂と生物の関連性について議論ができるようになった。今後も継続してほしい。
- ・生物に関するまとめでは「顕著な変化は見られない。大きな問題が生じていない。」と評価しているが、建設前後では少なくとも種構成の変化が見られ、ツチガエルの増加など変化も見られる。評価が適切か再考してほしい。

全体を通じて、「影響がない」との論調であるが、データを定量的に示し、現象を正確に表現することが重要。データ自体にアーティファクトがあり精度が低いといった側面もあるが、環境変化による応答が確認されたのであれば、概要版・本編に盛り込んでほしい。

6) 水源地域動態 (※宇奈月ダム定期、大川ダム定期 両ダムに関して)

- ・水源地動態に関する評価の根拠として、アンケート調査をもとにするなど、可視化していくことが望ましい。来訪者の内訳や属性がわかるだけでも向上する。宇奈月ダムと大川ダムでは同様の文言による評価となっているが、ダムごとの特性や位置づけに応じた根拠資料をもとにした評価が求められる。
- ・水源地域動態に関して、根拠データと評価をつなぐ整理が必要である。

(2) 大川ダム定期報告書（案）について

【総括】

令和2年度～令和6年度の調査結果の分析・評価をとりまとめた宇奈月ダムの定期報告（案）について審議された。委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は下記のとおりである。

なお、最終とりまとめは委員長一任とすることです承された。

1) 防災操作

- ・阿賀川流域における流域治水の取り組みについても、定期報告資料へ掲載してほしい。

2) 利水

- ・なし

3) 堆砂

- ・なし

4) 水質

- ・現地を見るとダム上流の流域人口が多い。「上流域の負荷はあまりない」と受け取れるとりまとめとなっているが、畜産由来の負荷も多い。現在は問題がなくても、注意して見なければいけないと感じる。普通の湖沼であれば富栄養化しているレベルかもしれない。揚水発電による混合により問題が顕在化していないだけかもしれない。上池の水質は、下池の水質に大きく影響を受けているようにも見える。

- ・上池のデータも示した説明は非常にわかりやすかった。

湖沼についてはCOD、河川についてはBODで評価すればよいが、湖沼のBODを概要版から除くなど、効率よく表現してもよい。環境基準の超過有無など、グラフのレンジを工夫して見やすくしてほしい。

5) 生物

- ・アレチウリと貯水位の関係は、非常に評価できる成果である。

外来種は侵入から非常に短期間で分布が拡大する。一方、植物の水辺国勢調査は10年間隔と、非常に間が空いてしまう。外来植物（特に特定外来生物）について、水辺国勢調査以外に、目視等で数年に1回調査を行うなど、北陸地整として提案できないか。

- ・外来種調査等だけでも頻度を高めることで、多くのことが見えてくる可能性がある。

- ・p22（日平均水位）とp87（時刻水位）では貯水位変動図が異なる。アレチウリの評価に際して、混乱しないような整理が必要である。

- ・特に水域のハビタットの整理が以降の生物の評価につながっていない。ハビタットとして大きな構造的なものに基づくより、マイクロハビタットのような物理的指標との関連性から分析した方よいかもしれないが、試行段階と理解する。エコトーン帯を外来種がカバーすることで在来種が減少した、といったようなことがハビタットの変化ともいえるため、そのような量的変化をダムフォローアップで示してもらえるとよい。
- ・陸域はダムができてからの変化、水域は瀬淵構造、といった視点といえる。
- ・ウグイ、ヌマチチブ、トビケラ目が増加しており、変化がみられるが、考察が明確でないため、何が起きているのかわからないといった印象を持つ。変化があるのに変化が無いように読み取れる箇所があるため、物理環境との関係が一文だけでもあると、今後のダムフォローアップに活かすことのできる。
- ・洪水調節の頻度、それに伴いどのような現象が確認されたか、などの観点を、その先の考察に加えていければよい。
- ・アレチウリについては深掘りされていてよい。「4日間冠水すると死滅する」とあるが、1回の冠水だけでも激減すると考えてよいのか、1シーズン何回かの冠水が必要かどうか、このあたりもまとめることで、大川ダムだけでなく、北陸や全国に対するダム管理上のメッセージとなることを期待する。

6) 水源地域動態 (※宇奈月ダム定期、大川ダム定期 両ダムに関して)

- ・水源地動態に関する評価の根拠として、アンケート調査をもとにするなど、可視化していくことが望ましい。来訪者の内訳や属性がわかるだけでも向上する。宇奈月ダムと大川ダムでは同じ文言による評価となっているが、ダムごとの特性や位置づけに応じた根拠資料をもとにした評価が求められる。

(3) 北陸地方ダム年次報告書（案）について

【総括】

大石ダム、手取川ダム、大町ダム、大川ダム、三国川ダム、宇奈月ダム、横川ダムの7ダムについて、令和6年度の管理・運用状況をとりまとめた北陸地方ダム年次報告書（案）について、報告された。なお、委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は下記のとおりである。

1) 防災操作

- ・流域治水プロジェクトは気候変動が考慮されているか、また、ダムの位置づけ、流域治水プロジェクトと治水計画との関係を把握したい。

2) 利水

- ・なし

3) 堆砂

- ・なし

4) 水質

- ・なし

5) 生物

- ・なし

6) 水源地域動態

- ・価値観がかわってきている社会情勢を踏まえ、画一的な評価ではなく、特性を踏まえた評価が求められる。

以上